

はじめに

寛文2年5月1日(太陽暦では1662年6月16日)に発生した寛文近江・若狭地震は、近畿地方北部で発生した歴史地震の中でも、推定マグニチュード(M)=7¹/₄~7.6という最大級の内陸地震であった(宇佐美、2003)。この地震では、若狭湾沿岸や琵琶湖沿岸での津波の発生はなかったが、地震に伴う火災、大規模土砂崩れ、地盤の隆起、土地の液状化、都市部での被災など、様々な形態の災害が発生した。

従来、この地震は一つの地震として考えられてきたが、今回の文献史料の調査・分析を通じて、新たな考え方が導き出された。それは、この地震が一つの地震ではなく、巳刻(午前9~11時頃)に若狭湾沿岸の日向断層の活動によって発生した地震と、午刻(午前11~午後1時頃)に琵琶湖西岸の花折断層北部の活動によって発生した地震、という二つの地震が、連続して発生した双子地震であったとする考え方である。このように、寛文近江・若狭地震を双子地震として捉えることは、地質学的・地震学的にも整合性が高いという見解に達した。

そのため、本報告書では、まず初めに寛文近江・若狭地震がどのような地震であったのか、地質学的・地震学的な特徴から検討する。この地震が、双子地震として捉えられるとすれば、どの活断層がどのような活動をして、どれほどの範囲に被害を与えたのかが問題となる。そこで次に、琵琶湖西岸の花折断層北部の活動による地震で、甚大な被害が生じた葛川谷や琵琶湖沿岸地域について分析を行い、その被害特性を明らかにする。また、若狭湾沿岸の日向断層の活動による地震で、多大な被害が生じた小浜や三方五湖周辺地域について分析し、地震に伴って生じた地盤の隆起現象がこの地域一帯の新田開発を促進した状況を検証する。最後に、花折断層北部の活動による地震で被災した京都について、被害の様相や震災への対応、人々の行動などを具体的に検討する。

なお、地震発生の時期が江戸時代の初期であったことから、現存する文献史料は後世と比べて豊富ではなく、被害状況や当時の人々の対応を知る手掛かりとなる史料記述は決して多いとはいえない。しかし、断片的な文献史料から判明する事実を丹念に追跡することで、可能な限りリアルな災害像を提示するように努めた。

参考文献

宇佐美龍夫：最新版 日本被害地震総覧 [416]-2001，東京大学出版会，2003。